

知識探訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

ボルネオ島から見る2018年マレーシア総選挙

山本博之 (京都大学東南アジア地域研究研究所准教授)

今回(2018年5月)の選挙でなぜ与党連合・国民戦線(BN)が敗北したのか。この問い方は適切ではない。マレーシアは半島部、東マレーシアのサラワク州、サバ州の3つの地域に分かれており、政党構成原理も政治イシューも異なっている。国会の約75%の議席を占める半島部の与党連合が中核となる連邦政府は、サバ・サラワク両州にとって「海の向こう」の話で、増税などで日常生活に直接関わらない限り、半島部のどの陣営が連邦政府を構成しても大差ない。

国会のうち、半島部の165議席を見ると、08年と13年の選挙でBNと野党(連合)が2回とも85議席と80議席を得ており、勢力は拮抗していた。他方、サバ(ラブアンを含む)とサラワクの57議席では、BNと野党(連合)は08年に55議席と2議席、13年に48議席と9議席だった。13年の選挙でBNは得票数で野党連合に負けており、サバ・サラワクとの連立に助けられて政権を維持したにすぎない。冒頭の問いは、なぜBNは13年の選挙で有権者の支持を失ったのか(それなのになぜ政権を維持できたのか)と問い直されるべきだろう。

BNが政権を維持できた背景には、与党に有利な選挙の仕組みがある。今回の選挙でも、与党に有利な選挙区割りを導入され、与党に有利な新聞・テレビ報道が見られた。野党支持が伸びているという世論調査もあったが、半島部で与野党の議席数に大差がつくことはなく、その結果を見てサバとサラワクの政党が連立の相手を変えるのが政権交代の可能なシナリオだと筆者は見ている。

しかし大方の予想に反して、選挙結果は半島部で野党連合・希望連盟(PH)が97対49というダブルスコアでBNを制した。サバ・サラワクではBNが30、PHが24(連携政党のWarisanを含む)、他の野党・無所属が3となり、連邦全体で政権交代が実現した。

サバでは、今回、連邦の与党連合(BN)、連邦の野党連合(PHとWarisanの連携)、そして地元の野党連合(サバ連盟)の三つ巴の戦いだった。国会と同時に行われた州議会選挙(定数60)では、BNが29議席、PH・Warisanが29議席、サバ連盟が2議席を得た。サバ連盟のジェフリー・キティガンは、かねてBN打倒を掲げていたが、選挙結果を見てBNと組み、BNのムサ・アマンが州首相就任の宣誓を行った。他方でBNからPH・Warisanへの鞍替えが続出してPH・Warisanが州議会の過半数を押さえ、Warisanのシャフ

イー・アブダルが州首相就任の宣誓を行った。これによりサバは州首相が2人存在するという異例の事態を迎えたが、ここではこの事態の行方ではなく、ジェフリーがBNを支持したことについて考えてみたい。

PHの中核はかつてのBNで、マハティールとアンワル・イブラヒムに象徴されるようにカリスマ的指導者が国民を安定と発展に導く統治である。サバ州のような地方にとって、強いリーダーシップによる統治とは、国が地方の資源を中央のインフラ整備や住民生活の向上に優先的に充てるもので、地方の生活向上には結びつかない。これに対して選挙前のBNはナジブに象徴される弱いリーダーシップによる統治だった。地方の支持獲得を求めるナジブから譲歩を引き出しやすく、州行政の高官たちはナジブ政権を歓迎していた。

現在、東マレーシアが位置するボルネオ島では、環ボルネオ高速道路の建設を含む中国資本による建設事業が多く進められている。中国資本の流入は今後も当分続くと見られている。それが現実ならば、賛否がどうであれ、それに対応する必要がある。マレーシアの一部となって55年が経過しても開発から取り残されたままの地方にとって、中国資本による開発は魅力的な選択肢に映る。独自政権の目がなくなったジェフリーがBNかPHかの選択に直面してBNを選んだことは、中国の影響力の伸張という現実のもとで弱い国家指導者を選ぶことに地方が活路を見出そうとする考え方として理解できる。

中央では政権交代により強いリーダーシップによるPH政権が生まれた。しかもPH政権は中国資本の受け入れを見直すという。新政権のもとで地方の人々の生活はどのようなになるだろうか。

< 筆者紹介 >

1966年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。マレーシア・サバ大学講師、国立民族学博物館助教授などを経て現職。専門はマレーシアの地域研究。サバ州・サラワク州の社会史、ジャウィ(アラビア文字表記マレー語)の社会的役割、災害復興時の社会再編、物語文化圏と映画など関心領域は広い。日本マレーシア学会(JAMS)運営委員。